

A translation of Susan Glaspell's "A Jury of Her Peers"(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山名, 章二 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3866

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



翻訳 スザン・グラスペル作「女仲間の評決」
 (その2)*

A translation of Susan Glaspell's "A Jury of Her Peers" ** (2)

山名 章二

二人は間もなく戻ってきた、閉め切った部屋は掛け値なしに寒く長居は無用だったのだ。

「本当にねえ！」と言いながら、ピーターズ夫人は台所机に荷物を放り出すと足早にストーブのそばへ移った。

ヘイルのかみさんは立ったまま町で拘留されている女が欲しいと言った衣類を調べていた。

「ライトはケチだったんだよ！」と彼女は叫び、繕いだらけのみすぼらしい黒のスカートをかざした。「たぶんそれであの人、ああいう風に人づき安いしなかったんだよ。だって、役割が果たせないって思ったんだよ、それにさ、慘めな気持ちでいたんじゃあなんでも楽しくないしね。まだミニー・フォスターだった頃にやあ、かわいい支度でき、明るかったんだよ、町の娘の仲間の聖歌隊で歌っててね。だけど、それも、ほんと、20年も昔になるねえ」
 なにか優しさをこめてみすぼらしい衣類を念入りに畳み、台所机の角に積み上げた。目を上げてピーターズ夫人を見やると、表情にいらつかせるものが浮かんでいた。

「構いやしないよ、あの人は」と独りごちた。「娘の時分にきれいな支度してたかどうかなんぞ大した違いがあるだろうさ」

そう言ってもう一度目をやったが、自信があるわけでもなかった。実際、これまでピーターズ夫人に確信が持てたことなど一度もなかったのだ。ああいう後に引くような様子をしているくせに、見るものの中にずうっと入りこむような目つきをしているのだ。

「差し入れしてやるのはこれだけかい？」とヘイルのかみさんは聞いた。

「いや」とシェリフの妻は言い、「エプロンが欲しいと言ったわね。変よね、

そんなもの欲しいなんて」と言いきった、「だって、留置場だったら汚れるものもあまりないわ、絶対。まあ、いくらかでもいつもの気分でいられるためでしょうけど。エプロンをつけるのになれっこなら……この食器棚のいちばん下の引き出しに入れてあるって言ってたわ。ほら、あったわ。それから、いつも階段の扉にかけてある小さなショールも、って」

彼女は二階へ通じる扉の裏から小さな灰色のショールを手にとると、一瞬立ちつくしたままでそれに目をやった。

にわかにヘイルのかみさんは相手の方へと一步すばやく踏み出した。

「ピーターズさん」

「なんです、ヘイルさん」

「あんた思うかね、あの人がやったって？」

おびえたような目つきになり、さっきから浮かんでいた目つきがうすらいだ。

「まあ、どうかしら」と、話題からすっと身を引くような声で言った。

「あのさ、わたしゃそう思えないんだよね」とヘイルのかみさんは堂々と言った。「どれかエプロン1枚だとかふだん使いのショールがほしいとか。瓶詰めを気にやんやりして、ねえ」

「うちの主人が」上の部屋の足音が聞こえると彼女は言いやみ、目を上げると、声をひそめて続けた「うちの主人がね、思わしくないって言うのよ。ヘンダスン検事の論告はとても皮肉がきついから、きっとつっこむんだろうって、目を覚まさなかったことに」

ヘイルのかみさんはしばらくなにも応えなかった。ついで「でも、ジョン・ライトだって首の下にロープを入れられたときに目を覚まさなかったようだけど」とつぶやいた。

「そうなのよね、変だわ」とピーターズ夫人は小声だが、語気を強めた。「人殺しにしては手口がおかしいって言うのよ」

声をたてて笑いはじめた、が自分の声が聞こえるとにわかに笑うのをやめた。

「うちの旦那の言ったとおりだねえ」とヘイルのかみさんは、腹を決めたようにふだんの口調で言った。「家の中に銃が一丁あった。それが解せないってさ」

「検事さんは、途々言ったのよね、立件には動機が必要、なにか、怒りか

なにか、気持が噴き出したのが分かることが欲しい、って」

「なんだか、そんな気持がわかるようなことはここらにはなんにもないね」とヘイルのかみさんは言った。「ないよね……」

言いやんだ。なにか気持に引っかかる風であった。台所机の真ん中にあったふきんに目が止まったのだ。彼女はゆっくりと机に向かって動いた。半分はきれいにかたづいていたが、残りの半分は散らかり放題だった。彼女の目がゆっくりと、ほとんど意に反するように、砂糖壺とその傍らの半分空の袋にむけられた。手をつけただけできりがつけられてない仕事だった。

一瞬の後、彼女は後ずさると、あの気持を吐き出すときの様子で、言った：「上はどんなかねえ？　もうちょっと片付けてあっただろうけどねえ。だってさ」彼女は言いよどんだ、すると想いがこみあげてきた「なんだかこそそしてやるじゃないか。人を町の牢屋に入れといて、るすの間に出かけてきて家を当人に不利なようにしむけるなんてさ」

「でもね、ヘイルさん」と保安官の妻は言った「法律は法律だわ」

「そうだろうけどね」とヘイルのかみさんは素っ気なく応じた。

かまどの方を向くと、火がろくに燃えないことでなにか言った。しばらく火をいじってから、背筋をのばすと、挑むような口調で言った。

「法律は法律で、燃えの悪いかまどは燃の悪いかまどだよね。あんたら、こんな強火にもならないで食事をこさえたいかね？」と言い、火かき棒でかまどの崩れた内張りを指してみせた。天火の扉を開き品定めを始めたが、胸中の想いに引き込まれ、なん年もこんなかまどでやりくりしなきやいけないってどういうことかを考えていた。ミニー・フォスターがこの天火でパンを焼いていたこと、自分が一度も会いに出かけてきてやらないこと、など、など。

ピーターズ夫人の「やる気も元気もなくなるのよね」という声が聞こえてギクッとした。

保安官の妻の目はかまどから流し台へ、さらに外から取り込まれたバケツ一杯の水へと移されていた。二人の女は無言で立ちつくし、二階ではこの台所を持ち場にしていた女を追いつめる証拠探しをしている男たちの足音がしていた。ものごとを覗き込む、ものを見ぬいてなにかほかのものを見るあの表情が保安官の妻の目に浮かんでいた。ヘイルのかみさんが次に話しかけたときには、優しい口調だった。

「着てるものをゆるめなよ、ピーターズさん。着てるのを忘れるんだよね、外だと」

ピーターズ夫人は部屋の奥にいき、毛皮のショールをはずして掛けた。一瞬の後、彼女は叫んだ「まあ、その人キルトを刺していたんだわ」そう言うと、キルトの布地を高くつみあげた大きな裁縫かごをかざした。

ヘイルのかみさんは布切れをなん枚か台所机にひろげた。

「丸太小屋模様だね」と、布切れをあわせながら、言った。「きれいだ、ね？」

二人はキルトに気をとられていて、階段をおりてくる足音が耳にはいらなかつた。

階段の扉が開いたのはヘイルのかみさんが言っているところだった：

「キルトを仕上げるつもりだったのかねえ、それとも糸尻をくくるだけだったのかねえ、どう思う？」

保安官は肩をすくめてみせた。

「女衆は仕上げるつもりだったか、くくるだけだったかと、ご思案中だ」

あれこれ女衆のやり口をめぐって笑い声が起き、かまどで手をあぶり、そして郡検事はきびきびとした口調で言った。

「さ、さっさと納屋に行って、調べをすませよう」

男たち三人が出て、外扉が閉まる、「それほどおかしなことがあるなんて私にや思えないけど」とヘイルのかみさんは憤慨して言った「証拠をあつめる間、こまかいことで時間をつぶして待ってるのにさ。なにも笑うようなことじゃないよ」

「たしかに、男衆はひどく大事なことで手が一杯なのよね」保安官の妻は弁解でもするように言った。

彼らはキルトの素材を念入りに調べることに戻った。ヘイルのかみさんはちゃんと針目がそろった縫い目を見ていた、そして、その縫い目をつけた女のことにこだわっていると、保安官の妻が妙な口調で言うのが聞こえたのだ：

「まあ、これを見て」

彼女は差し出されている布切れを受けとろうと振りむいた。

「縫い目よ」とピーターズ夫人が慌てた口調で言った。「他はきれいに縫い目がそろっているわ、でも、こここのところが。まったく、なにしてるのか分かつてないような縫い目だわ」

二人の目が会った、ひらめくもの、通い合うものがあった。ついで、やつ

とのことでもあるかのように、二人は相手からはなれ、自分に戻る様子であった。しばらくの間、ヘイルのかみさんはその場に座り、ほかの縫い目とひどくちがう縫い目の上で両の手を組んでいた。すると、彼女は結び玉をひっぱり、糸を引きぬいてしまった。

「まあ、なにをしているの、ヘイルさんたら？」と保安官の妻は、びっくりして、きいた。

「へたな縫い目を一つ二つちょっと抜いてるだけだよ」とヘイルのかみさんは穏やかに言った。

「なんでも、さわってはいけないわ」とピーターズ夫人はさじを投げたように言った。

「この縁だけはちゃんとしとくよ」と、依然としてあの穏やかで、こだわりのない口調でこたえた。

針に糸を通すと、縫い目がよくなかったところにしっかりと針を刺した。しばらくは何も言わず刺し続けた。すると、あのか細い、怖じ気づいた声でいうのが聞こえた、

「ヘイルさんったら！」

「え？ なにかね？」

「なんだっと思った？ そんなに……そわそわしてたのは？」

「なんだかねえ」とヘイルのかみさんは時間をかけるまでもない、どうでもよいと言わんばかりだった。「わからないね、ほら、そわそわしたのかどうか。かったるいだけでも縫い目がひどくなることがあるからね、私も」

彼女は糸を切り、目の角からピーターズ夫人を見上げた。保安官の妻の小ぶりでほっそりした顔がこわばったように見えた。なにかを覗き込むようなあの目つきだったのだ。しかし、次の瞬間、彼女は居場所をかえると、か細い、煮え切らない言い方で言った：

「さ、衣類を包んでおかなくちゃあ。男衆の調べが思いのほか早く済むかもしれないし。紙としばるものがあるかしらね」

「たぶん食器棚だよ、その」と、ちらっと見回してから、ヘイルのかみさんはほのめかした。

縫いそこないの一枚が糸を抜かれないとまだった。ピーターズ夫人がむこうを向いたまま、マーサ・ヘイルは、今度は、その布切れをしげしげと見て、ほかのきちんと縫われているのと比べてみた。

違いは驚くほどだった。おかしな縫い目の布切れを手にしていると奇妙な気がして、たぶんキルトでもして気持を抑えようとした女の心ここにない想いが自ずと伝わって来るようであった。

が、ピーターズ夫人の声がして、我に返った。

「これは鳥かごだわ」と言ったのだ。「あの人、小鳥を飼っていたの、ヘイルさん？」

「だから、飼ってたかどうか知らないんだよ」 彼女は振り向いてピーターズ夫人がかざしていた鳥かごに目をやった。「もう長いことここに来たことがなかったからね」 彼女はため息をついて言った。「去年、カナリアを安く売る男がきたことがあったけどさ、買ったとは知らないねえ。買ったかもねえ。自分でもとてもきれいに歌ったんだよ」

ピーターズ夫人は台所を見回した。

「こんなところに小鳥なんて考えてみてもちょっと変ねえ」 彼女は半分声をたてて笑ったが、防御線を張ろうとしたのだ。「でも、飼っていたはずよね。そうでなければ、鳥かごを持ちたいかしら？ 小鳥はどうしたのかしら？」

「たぶん猫がとったんだろうね」とヘイルのかみさんは言うと、また針を刺しはじめた。

「ちがうわね、猫は飼ってなかった。人によるけれど、猫のことを気持悪がるじゃない？ そんな人なんだわ、怖がるのよ。きのうも、連れてこられたとき、うちの猫が部屋に入ってくると、あの人ひどく慌てて、連れ出すようになって私に頼んだのよ」

「あたしの妹のベッシーもそなだったよ」とヘイルのかみさんは笑って言った。

保安官の妻はこたえなかった。声がしないのでヘイルのかみさんは振り返った。ピーターズ夫人は鳥かごを調べていた。

「この扉を見て」とゆっくりと言った。「こわれている。蝶つがいが一つ引きちぎられているわ」

ヘイルのかみさんがすこし近寄った。

「誰かが乱暴にしたみたいだね」

また、二人の目が会った、おどろき、不審で、心配する目つきだった。しばらくの間、どちらもなにも言わず、身じろぎもしなかった。すると、視線をそらしながら、ヘイルのかみさんはぶっきらぼうに言った：

「なんか証拠をつかみたいんなら、とっととやって欲しいねえ。あたしゃこの家がいやなんだよ」

「でも、一緒に来てくれてとてもうれしいのよ、ヘイルさん」ピーターズ夫人は鳥かごを台所机におき、腰をおろした。「ここでひとり座っていたら、寂しいでしうしね」

「そうだよ、ねえ」とヘイルのかみさんが気持を合わせてきた、なにかきっとと静かな口調だった。手にしていたキルトの縫い物がこの時膝に落とされ、彼女は違う口調で言った「でもね、後悔してことがあるんだよ、ピーターズさん。時々は寄ってやっていたらねえって。本当にそうしてたらねえ」

「でも、ひどく忙しかったのよね、ヘイルさん。家や子供さんで」

「寄れば寄せたんだよ」と言葉少なに言い返した。「寄らなかったのは陰気になるからだけね、ま、なおのこと寄ってやらなきゃいけなかつたんだけどさ。どうもさ」と彼女は辺りを見回した「この家が気に入ったことがないんだよ、まったく。窪地で街道から見えないからかね。なんのせいかわからないけど、寂しい家だしね、いつもそうだったよ。時どき寄って、ミニ・フォスターに会ってやれてたらねえ。今になってわかるんだよ……」その先は言葉にしなかった。

「でもねえ、自分を責めてはいけないわ」とピーターズ夫人が助け舟を出した。「どういうものか、なにかが持ちあがらないと、よその様子ってわからないものだから」

「子供がいなけりや楽だけどね」とヘイルのかみさんが、しばらく黙りこくった後、ボソッと言った「でも、家が寂しくなるよね。それにあの亭主は日中ずっと留守だったしさ、帰ってきたって話し相手なわけもなかった。ジョン・ライトとは知り合いだったかね？」

「よく知ってるというほどじゃなかったわ。町で見かけたことはあったけど。いい人だったらしいわね」

「そうだねえ……いい人だったねえ」とジョン・ライトの隣人は陰鬱な口調でみとめた。「酒は飲まない、約束は人並みに守る、それに、借りた金は返したようだしね。でもねえ、きつい男だったんだよ、ピーターズさん。出くわして挨拶するだけでも……」彼女は言いよどみ、すこし身震いした「骨までしみとおる風のようだったよ」目の前の台所机におかれた鳥かごに視線が止まるとき、ほとんど苦々しげに、つけ加えた「あれじゃあ、小鳥の1羽

ぐらい飼いたくなつただらうよ！」

とつぜん前かがみになると、鳥かごをジーッと見つめた。「でもさ、小鳥はどうしたんだらうね？」

「わからないわねえ」とピーターズ夫人は返事をした「病気になつて死んだのでもなければねえ」

しかし、そう言った後で、彼女は手を伸ばし、こわれた鳥かごの扉を開いた。なぜか二人とも、ひきつけられたかのように、鳥かごを見まもつた。

「あの人とは知り合いじゃなかつた、のかね？」ヘイルのかみさんはきいた、声にはいくぶん優しさがあつた。

「きのう連行されて来るまではね」と保安官の妻は言った。

「あの人も……考えてみれば、あの人こそすこし鳥のようだつたねえ。ほんと優しくてかわいかつた、けど気おくれしたところがあつて、それに……そわそわしてたねえ。すっかりかわっちまつたんだよ」

そのことに長い間氣をとられていたが、やつと、なにかうれしくなることでも思いだしたか、日常茶飯事に話が変わってほつとしたかのように、彼女は叫んだ：

「あのさ、ピーターズさん、このキルト一式を差し入れてやつたらどうかね？　まぎれるかも」

「まあ、ほんと名案だと思うわ、ヘイルさん」とシェリフの妻が賛成したが、すなおに優しい気配になつて喜んでいるかのようだつた。「それなら、なんの文句も言われないですむわ、ね？　で、なにを持っていってあげようかしら？　布切れと道具はこの中なのかしら？」

二人は裁縫かごに向ひなおつた。

「これで赤いのがなん枚かできる」と、巻いた布地を持ち出しながら、ヘイルのかみさんが言った。その下に箱があつた。「これだ、裁縫鋏が入れてあるかも、道具も」箱を手にした。「きれいな箱だねえ！　娘の頃買ったものだよ、きっと」

しばらく手にしていた、が、ついで、小さくため息をつくと、箱を開けた。その瞬間、手は鼻にあてられた。

「おやまあ！」

ピーターズ夫人が近寄つたが、顔をそむけた。

「この絹の布切れになんだか包んであるねえ」とヘイルのかみさんがつぶ

やいた。

「鉄じゃないわ」と言うピーターズ夫人は、おじけづいた口調だった。

手の震えをとめられないまま、ヘイルのかみさんが布切れを持ち上げた。

「やだ、ピーターズさん！」と叫んだ。「これは……」

ピーターズ夫人が腰をかがめた。

「飼っていた小鳥よね！」とつぶやいた。

「だけど、奥さん！」とさけんだ。「見てよ！ 首……首を見て！ もうすっかり……そっぽをむいちまって」

彼女は箱を持ったまま遠ざけた。

保安官の妻はもう一度かがみ込んだ。

「だれか、首をねじったのね」とゆっくり深い声で言った。

そして、また、二人の目が会った、今度は兆しはじめる理解、ふくらむ恐怖の表情だった。ピーターズ夫人は小鳥の死体から鳥かごのこわれた扉へと視線をうつした。また、二人の目が会った。ちょうどその時、表の戸口で音がした。

ヘイルのかみさんは箱を裁縫かごのキルトの布切れの下にすべりこませ、その向かいの椅子にすわりこんだ。ピーターズ夫人は立ったまま台所机につかまっていた。郡検事と保安官が外から入ってきた。

「さて、ご婦人方」と郡検事が、深刻な話題から気軽なお世辞に話題を代えるように、言った「キルトを縫い合わせようとしていたのか、糸をくくろうとしていたのか、答は出ましたかな？」

「私たちが思うには」と保安官の妻があわてた口調で口を切った「くくろう……としていたんです」

郡検事は上の空で女の口調の変化に気がつかなかった。

「なるほど、それは、たしかに、興味深いですな」と大目に見るよう言つた。鳥かごに目が止まった。「逃げられたんですね？」

「猫がとったと思ってるんだけどね」奇妙に抑揚のない口調でヘイルのかみさんが言った。

彼はなにか思案するかのように、歩き回っていた。

「猫がいるのかね？」と出し抜けに言った。

ヘイルのかみさんはピーターズ夫人にちらっと視線を走らせた。

「いないようですよ、今は」とピーターズ夫人が言った。「ほら、猫は迷信

深いから。いなくなるのよね」

彼女は椅子に座った。

郡検事の受けたえはなかった。「誰かが外部から侵入した形跡はゼロだと」と、中断した話を再開する口調でピーターズに言った。「もともと家にあったロープだ。ちょっと二階に戻って確認しよう、逐一。絞り込むとすれば、誰かが……」

男たちが通りぬけ、階段の扉がしまった。

女二人は身動きもせず座ったまま、互いに見やりもせず、なにかを覗き込みながら同時に抑えているといった風だった。口を開くと、なにが出てくるか恐いが、言わずにはいられないという風でもあった。

「かわいがってたんだよね、小鳥」とマーサ・ヘイルが低い声でゆっくりと言った。「あのきれいな箱に入れて埋めてやるつもりだったのさ」

「まだ子供だったころ」声をひそめて、ピーターズ夫人が言った「私の猫が……男の子が斧でね、見ている目の前で……そばに行く間もないうちに……」彼女は一瞬顔を覆った。「止められなかったら、その子を」と言いよどみ、足音のする上方へ目を上げ、弱々しく言いきった「痛い目に遭わせてたわね」

「どんな具合なのかね」見知らぬ土地に試しに足を踏み入れるかのように、ヘイルのかみさんがやっと口を開いた「一度も子供がいたことがないって」

彼女の目は台所をゆっくりと眺め、長い年月この台所がどんな意味を持っていたのかを見てとる様子だった。「そうだよ、ライトの旦那は小鳥なんか嫌がるだろうさ」と続けて言った「さえずったりするものはね。ミニーもよく歌ったもんだよ。旦那はその息の根もとめたんだ」

ピーターズ夫人が居心地が悪くなつて身動きした。

「と言って、誰が小鳥を殺したのかわかってはいないけどね」

「ジョン・ライトならよく知ってたけどね」がヘイルのかみさんの答だった。

「その夜この家でおそろしい犯行があったのよ、ヘイルさん」と保安官の妻が言った。「寝入っている人を殺したのよ、なにか息の根を止めるものを首に巻き付けて」

ヘイルのかみさんの手が鳥かごに伸びた。

「首にね。息の根を止めたんだよね」

「誰が犯人かわからないのよ」ピーターズ夫人は小声ながらとりみだした

言い方をした。

ヘイルのかみさんは身動きしないままだった。「なん年もなん年も……なあんにもなくて、やっとのことで鳴いてくれる小鳥1羽……そのあげくに鳥が鳴かないとなったら、おそろしいだろうねえ」

ピーターズ夫人にとって、なにか自分であって自分でないものが口を開き、彼女自身自分だとは知らないものに語りかけたかのようであった。

「私、寂しさがどんなものか知っているわ」とそれまではなかった、単調な口調で言った。「ダコタで所帯を持って、初めての子供に死なれて、独りぼっちだった……」

今度は、ヘイルのかみさんが身動きした。

「証拠探しはそろそろ終わるだろうかね？」

「寂しさがどんなことか知ってるの、私」ピーターズ夫人はまったく同じ口調で繰り返した。次いで、彼女も身を引いた。「法律は罪を罰しなくてはならないわ、ヘイルさん」と引きつった小声で言った。

「娘の頃のミニーを見てもらいたかったねえ」が答だった「青いリボンのついた白のワンピースで、聖歌隊席で立ち上がって歌ってた頃のミニーをねえ」

そんな娘姿の思い出、自分が20年も隣で暮らしてきながら、その娘にろくに生きもしないで死なせてしまった事実がとつぜん堪えられなくなった。

「ほんとに、たまに来てやってたらねえ！」と叫んだ。「そりゃあ赦されないことだよ。だから罰をあてられるのかねえ？」

「とりみだしてはいけないわ」とおびえた声でピーターズ夫人が言った。

「助けが要るってわかってやれたはずなんだ！ いいかね、おかしいんだよ、ピーターズさん。隣同士でも近くなかつたんだよ。あれもこれも苦労は同じでも、これがちがうんだよねえ！ もしもさ……だけど、どうしてあたし達わかるのかね？ 今の今わかっていることが、どうしてわかるのかね？」

すばやく目元を片手で払った。次いで、瓶詰め用の瓶が台所机にあるのを見ると、手を伸ばした。

「あたしだったら、ジャムがダメになったなんて言わないね！ だいじょぶって言ってやっとくれ。全部……だいじょぶだって。ほらこれ、差入れして、安心さしとくれよ***。割れて……割れてるなんてわかりやしないよ。」

彼女は視線をそらせた。

ピーターズ夫人は瓶に手を伸ばした、瓶を手にするのがうれしい、なじんだものに触っていれば、手持ち無沙汰にならず、ほかのことをしないでいられるかのようだった。立ち上がると、ジャムを包むものはないかと見回し、表の部屋から持ってきてあった衣類の山からペチコートをとると、瓶を包みはじめた。

「そうよね！」と高く、わざとらしい口調で言った「わたしたちの声が男衆に聞こえなかったのはいいことだわ！　ささいなことにつっかり興奮してねえ……カナリヤ1羽死んだからって」最後の言葉は早口だった。「ほんと、笑われるところよね？」

階段に足音がした。

「そうかもねえ」とヘイルのかみさんがつぶやいた「笑わないかも」

「だいじょうぶだ、ピーターズさん」郡検事の口調は鋭かった「もうこれすべて明らかだ、のこりは動機だけだ。だが、女衆は、陪審員となるとなあ。なにか決め手があれば、なにかはっきりと……」

ヘイルのかみさんはこっそりピーターズ夫人を見やった。相手も自分を見ていた。どちらもすばやく視線をそらした。外の扉が開いて、ヘイルが入ってきた。

「馬車はまわしときましたよ」と言った。「外はかなり寒いね」

「しばらく独りでここに残る」と郡検事はとつぜん宣言した。「後でフランスを迎えによこしてもらえる、だろうね？」と保安官にきいた。「首尾がもうひとつものたりないんだ」

また、ほんの一瞬、二人の女の目が会った。保安官が台所机に近づいた。

「家内が差し入れするものを見ておきたいって言いましたかね？」

郡検事はエプロンを手にした。声をたてて笑った。

「はは、あまり危険性はないね、ご婦人方が選んでくれた品は」

ヘイルのかみさんの手は箱が隠してある裁縫かごにのせられていた。手をだけなくてはまずいと感じた。できない様子だった。郡検事がつみあげて箱を隠したキルトの布切れを1枚手にした。彼女の目は火がついたように感じた。かごを手にとったらひったくってやる気だった。

しかし、手にはしなかった。もう一度小声で笑うと、目をはなして、言った、「大丈夫だ、奥さんなら見張りは要らない。保安官の妻は法律と結婚しているようなものだからね。そんな風に考えたことはありますかな、奥さん？」

ピーターズ夫人は台所机の傍らに立ちつくしていた。ヘイルのかみさんがちらっと見上げた、が顔は見えなかつた。そむけてしまつてゐたのだ。口を開くと、声がくぐもつてゐた。

「いいえ……そのとおりには」と言つた。

「法律と結婚、かねえ！」彼女の夫がくすくす笑いながら言つた。彼は戸口へと移動し表の部屋に入ると、郡検事に言つた。

「ちょっとこっちへきてもらいたいんだ、ジョージ。窓を見ておかんとね。」

「ああ、窓ね、窓」と郡検事はあざけるように言つた。

「すぐだから、ヘイルさん」と保安官はまだ戸口で待つてゐた農夫に言つた。

ヘイルは馬の世話に出て行つた。保安官は郡検事のあとについて別室に入つて行つた。また、二人の女は、これで最後だが、しばらく台所に二人きりになつた。

マーサ・ヘイルは、両手をきつく押しつけ合はせ、相手を見つめたままで、勢いよく立ち上がつた。彼女次第だったからだ。はじめは目元が見えなかつた。保安官の妻が、法律との結婚とか言はれたときに目をそらせたまま振り返らなかつたのだ。しかし、今度は、ヘイルのかみさんが振り返らせた。彼女の目がそうさせたのだ。ゆっくりと、いやいやながら、頭をめぐらせ、とうとう相手と目を合わせた。一瞬二人が落ちついた、燃えるような視線でたがいにとらえあい、彼らの目がそらされたりたじろいだりすることはなかつた。次いで、マーサ・ヘイルの目が裁縫かごへと視線を誘導した、そこにはもう一人の女……いまはここにいないが、この1時間のあいだずっと一緒にいた女の有罪を確実にするものが隠されてゐた。

しばらくピーターズ夫人は身動きしなかつた。次いで、動いた。勢いよく前に出ると、キルト用の布切れを勢いよくどけ、箱を手にすると、自分のハンドバッグに入れようとした。大きすぎて無理だった。必死になつた彼女は箱を開け、小鳥を取り出しあげた。しかし、勢いもそこまでだつた、鳥にさわれなかつたのだ。なにもできないまま、愚かしく立ちつくした。

屋内でドアの取っ手がまわされる音がした。マーサ・ヘイルは箱を保安官の妻の手からひつたくると自分のコートのポケットに入れた、ちょうど保安官と郡検事が台所へ入つて來るところだつた。

「さて、ヘンリー」と郡検事は軽薄な言い方をした「とにかくわかつたことは容疑者がキルトを縫い合わせる気はなかつた、ってことだ。しようとし

ていたのは……ご婦人方、なんと言うんでしたかな？」

ヘイルのかみさんの手はコートのポケットにあてられていた。

「くくる……って言うんですよ、ヘンダスンさん」

*(その1) は『大妻レビュー』第42号（2009年），35-45頁に収録。なお，今回で完了する。

**英語版テクストは，今回も，1) <http://www.learner.org/interactives/literature/story/fulltext.html> および 2) Susan Glaspell, *A Jury of Her Peers* (New York: Creative Education, 1993) を使用した。

***この文に相当する箇所は，上記2) では，“Here, I take this in to prove it to her!” (p. 44) となっているが，1) の “Here, take this in . . . ”, 命令形としての表記に従った。2) は文法的に無理を生じ，また，1) は文脈になめらかにかつ力強く貢献する，と判断した。